

はしがき

本論集は、二〇一九年度に実施した国際日本文化研究センター（日文研）での共同研究『「日本型」教育文化を問う——新たな人間形成論をめざして』（代表：稲垣恭子、瀧井一博）に端を発する。その後、この研究会は、やはり日文研において、「日本型教育の文明史的位相」（二〇二〇年度～二〇二三年度。代表：瀧井）と題して発展的に継続して行われた。このたび両研究会の成果をまとめるにあたって、本研究プロジェクト発足の経緯と趣旨について簡単に述べておきたい。

「日本型」教育というそれ自体論争的なテーマをあえて設定した背景として、教育のグローバル化をめぐる状況への関心があった。近年、世界大学ランキングやPISAテストにみられるような各段階の教育とその成果の世界標準化が進行しつつある中で、日本の教育の「低下」が問題として取り上げられることも少なくない。その一方で、[EDU-Port ニッポン]事業のように、日直や掃除、給食といった日本式の教育慣行に関心を寄せる海外の教育現場に向けて、「日本型」教育として展開する試みも行われ、その成功例も報告されている。

日本の教育言説においては、欧米中心的な教育観、能力観を暗黙の前提として、それに追いつこうとするメンタリテイ＝「キャッチアップ近代」（荻谷剛彦『追いついた近代 消えた近代——戦後日本の自己像と教育』岩波書店、二〇一九年）が広く浸透する一方で、日本の教育の卓越性を「日本型」として本質主義的に称揚する言説とが入り混じる状況があるが、いずれもグローバルな視点からというよりも、むしろドメスティックな言説空間の中での論争という感がある。

しかし現実の教育においては、明治以降の近代的な教育制度をとりつつ、それ以前の子育てや教育の慣習や文化

も取り込んだ独自の展開をしてきた。こうした状況をふまえ、歴史的、文化的な文脈の中で蓄積されてきた教育を「日本型」教育として捉え、脱コロナルな視点をふまえつつグローバルな視野から再考するプロジェクトが、京都大学教育学研究科に設置した新しい研究部門（グローバル教育展開オフィス）を中心に発足した。これが本プロジェクトの出発点である。

まず教育学の各分野から「日本型」教育をめぐる理論的、方法的な課題を掘り起し、それらへのアプローチについて議論と検討を開始すると同時に、日本の教育システムについてのアメリカにおける代表的研究者であるジョージア大学のジョセフ・トービン (Joseph Tobin) 教授など海外の日本研究者とのシンポジウムを開催した。

これを土台として、より広い視野から「日本型」教育の内実を検討し、さらに実践的な課題へと展開させることを目的として、国際日本文化研究センターにおける共同研究として始まったのが、本研究プロジェクトである。教育学の各分野に加えて、歴史学、政治学、社会学、日本文化研究、東アジア文化研究等、幅広い分野の専門家とともに議論を行うことによって、「日本型」をめぐる複雑でアンビバレントな状況について正面から取り組むことが可能となった。さらに、こうした議論を通して「日本型」の意味を再検討すると同時に、東アジア文化圏の教育文化との比較も加えて、「欧米型」教育とは異なる仕方での普遍性をもった「教育文化モデル論」の可能性を提示したというのが、本共同研究の趣旨である。

本プロジェクトでは、まずメンバーそれぞれの立場から「日本型」教育文化についてのアイデアを提示し自由に議論することから始めた。本論集では、そうした「日本型」教育をめぐる様々な角度からのアプローチの可能性を広く提示している。これらのアイデアと知見は、本研究プロジェクトの後継である前記の共同研究「日本型教育の文明史的位相」において、さらに展開していった。

ところで、「日本型」という視点は教育だけではなく、むしろ古典芸能や伝統文化産業、さらにアニメ、マンガ等を「日本型」の文化として捉え直そうとする大きな流れとも対応している。例えば、野村萬斎氏の狂言とバレエとの共演や、京都の表具師による伝統工芸の現代アートとしての展開など、従来の日本の「伝統文化」を強調する

のとは異なる新たな試みが現れている。これらは、日本／西洋、伝統／近代、芸術／市場といった枠を超える新たなグローバルな文化産業の可能性を考える上でも示唆的である。こうした試みを参照しつつ、広い視野から教育と文化産業の関係についても具体的に考えていくことが今後の課題となろう。

最後に、本研究プロジェクトに意義を見出し、その成果論集の刊行を引き受けてくださった法律文化社編集部と田引勝二氏に深甚な感謝の意を表したい。

二〇二五年一月

稲垣 恭子
瀧井 一博

〔追記〕

本論集に御寄稿いただいている阿川尚之先生は、本書の完成を御覧になることなく、二〇二四年一月に帰らぬ人となられた。療養中のなか、何度かメールをいただき、本書の刊行を楽しみに待っていてくださったのに、それが間に合わず、まことに残念で斬鬼の念に堪えない。今この場で、先生の御霊前に刊行を御報告し、本書を献呈申し上げたい。